

【論文】

マルクス貨幣論の形成

—『経済学批判要綱』を中心として—

下平尾 勲

目 次

ま え が き

I 問題の所在

II 貨幣形成の基本視角

III 貨幣の本質＝価値形態

IV 貨幣の形態と貴金属

V 貨幣の諸形態規定

VI む す び

ま え が き

マルクスの青年時代に執筆された論文（いわゆる初期論文）の中での貨幣把握には、主として二つの観点があつた。第一は、当面する商品交換の困難（アダム・スミス）から貨幣の発生をとくという考え方を排除し、商品の交換価値→貨幣→交換という商品の内的な社会的性質の系譜に立脚して貨幣の形成をとくという観点であつた。近代資本主義社会の内部においては、貨幣は一般的・社会的な性格をもつものとしてのみあらわれてくるが、この絶対的な交換能力をもつという貨幣の特殊な地位は、すべての商品に共通な一般的な人間労働の対象化されたもの＝交換価値の外化したものにほかならない。だから、商品の交換価値の系譜の上で貨幣の形成の論理を首尾一貫して展開するという方法がとられていた。

第二の観点は疎外論の立場であつた。貨幣は、人間の労働の産物であるが、人間から疎外された存在である。さらに、この疎外された存在である貨幣をつくりだすことによって、人間は実践的に行動し、疎外された対象をますます拡大する。たとえば、「ユダヤ人問題によせて」の終りの部分で次のようにのべている。

「貨幣はあらゆるものの一般的な、自立的なものとして構成された価値である。……

貨幣は、人間の労働と存在とが人間から疎外されたものであって、この疎外されたものが人間を支配し、人間はこれを礼拝する」¹⁾ (Marx-Engels Werke. Bd. I, S.375)。

前半のパラグラフでは、経済的基礎範疇としての価値の自立によって、貨幣が形成されるという観点を示しており、これに対して後半のパラグラフでは、疎外の視点から貨幣が取りあげられている。初期の論文における貨幣認識には、二つの観点のうち、後者の立場が強くあらわれている。貨幣が人間解放の問題意識の中で論じられているからである。これに対して、『経済学批判』や『資

本論』では、諸商品の交換関係の中で現象してくる価値性格が貨幣認識の基本線とされ、疎外は「商品の物神的性格とその秘密」として、商品論の性格規定あるいは貨幣や資本の特殊歴史的な性格規定の地位しかあたえられていない。商品価値は、窮極においては、貨幣の本質、形態及びその流通における諸事象を支配するのであって、このような秩序の中で、貨幣の独自の歴史的な形態が説明される。交換価値という考え方がなければ、貨幣の本質や形態や性格に関する理論的な洞察は何もできない。マルクスは、商品の価格や貨幣に先行させて商品価値の内容と性格をおき、商品交換の必然的な結晶として貨幣を説くのである。このように、疎外の視点から交換価値の観点にたつ貨幣論の視点へ大きく転換をとげた契機は何であろうか。その最大の要因の一つとして、『経済学批判要綱』をあげることができる。そこで、『経済学批判要綱』の中で、マルクス貨幣論の内的諸関連の論理がいかにか形成されてきたかが問題となる。本稿では、マルクス貨幣論の意義を、『経済学批判要綱』を中心として、その形成史の面からとりあげたい。

1) 『経済学批判要綱』——*Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie*——の引用ページはGr. D.63, M.79と略記してあるが、D.63というのはDietz Verlag Bellin, 1953のページ数であり、M.79というのは*Ökonomische Manuskripte* 1957/8, II/1・1, II/1・2 *Marx-Engels Gesamtausgabe* (MEGA), Dietz Verlag Berlin 1976, 1981のページ数である。

『資本論』——*Das Kapital, Kritik der Politischen Ökonomie*——の引用ページの指示は、K. III, S.140 [128]というように略記してある。はじめにあげた原点のページは、M. E. L. Institut版で、第二次世界大戦後ディーツ社が復刻した版のページ数である。角括弧の中の指示は、*Marx-Engels Werke*, Dietz Verlag Berlin, 1972, Bd.25のページ数である。

『剰余価値学説史』——*Theorien über den Mehrwert*——の引用ページの指示は、Mw. III, S.483と略記し、おなじく『経済学批判』——*Zur Kritik der Politischen Ökonomie*——の引用ページのそれは、Kr. Bd. 13, S.110と指示してあるが、前記著作集第26巻第3分冊、および第13巻の原典ページ数である。また「ユダヤ人問題によせて」等も同様である。

邦訳については、『資本論』は、主に長谷部文雄訳、青木書店版、資本論翻訳委員会訳、新日本出版社を用いた。『剰余価値学説史』と『経済学批判』はマルクス・エンゲルス全集版（大月書店）を用い、『経済学批判要綱』は、高木幸二次監訳、大月書店版によった。しかし必ずしも訳文通りではない。

I 問題の所在

『経済学批判要綱』の貨幣の章は、アルフレッド・ダリモン (Alfred Darimon) の著書『銀行の改革について』(パリ, 1856年)の批判をもってはじまっている。ダリモンは、割引に示された手形の量=有価証券の価格とその変動は、流通に必要な貨幣量をあらわしているとする事によって、「信用の必要と貨幣の必要」とを意識的に同一視し、そして「銀行の金属準備で表わされるその金属的基礎と有価証券で表わされる流通需要とが対立すること」を示そうとしたのであった。

銀行の割引された手形の量やその変動は、信用に対する需要を表しているのであって、流通している貨幣量とはまったく異なる²⁾。銀行券の流通量は、商品流通によって規定され、金属準備量の増減とは関係をもたない³⁾。銀行券の流通量を銀行は統制できない⁴⁾。ダリモンのいう有価証券の増加が金属準備の減少よりも少ないということは、手形割引によって発行された銀行券は預金

されるということによって容易に説明されうる。また金属準備の減少と有価証券のよりわずかな減少が同時におこったのは、銀行からの預金の引出し、または金兌換のために銀行券が銀行にもちこまれたので、銀行自身の割引がそれだけ制限を受けたからである。銀行が保有する有価証券の価格を示す数字は、けっして流通手段量を示すのではないのであって、信用にたいする需要の大きさの指標にすぎず、両者が同じ大きさとしてあらわれることはめったにないのである。

ダリモンがこのような主張を行ったのは、次のような考え方に立っていたからである。すなわち、恐慌は銀行券の金への兌換性の停止からおこった。どの商品も貨幣にまで高め、貨幣特有の性質を付与するか、あるいは、貨幣を商品の地位にまで引き下げるべきであって、そうすれば、金銀に兌換可能な銀行券に特有な性格はなくなり、その弊害としての恐慌はなくなると結論づけた。けっきょく、労働貨幣論に立脚して、ダリモンは貨幣改革論を主張したのである。

ダリモンの著書『銀行改革について』に関して、マルクスは、1857年1月10日付エンゲルス宛の手紙の中で「プルドンの弟子の新著が僕の手もとにある。……思いつきは古くさい。金銀の貨幣資格の剥奪とか、すべての商品が金銀と同じ資格の交換手段になるとかいうのだ」(Werke, Bd.29, S.93)と書いている。

ダリモンにしてみれば、1847年の恐慌が発生した時に、いたく経験したように、取引業者が貨幣や銀行券を求めて銀行に殺到している時に、銀行は手形割引や貸付を拒否し、貨幣自体に異様な特権を与えている。金銀や銀行券に特権を与えることをやめ、人々が現実的に労働したことを証明した労働貨幣を発行すれば、恐慌がなくなるはずだ。このようなプルドンの流れをくむダリモンの問題提起自体は『哲学の貧困』ですでに論破した古くさい思想を継承したものであるが、新たに解答を与えなければならなかった。それは、金属貨幣、信用貨幣に代って労働貨幣を発明したところで、多様な文明化された貨幣の形態があっても、商品の生産と交換制度が存在するかぎり、必然的に貨幣が発生しなければならないのはなぜか、という根本的な問題が残されていたからであった。すなわち、商品生産が行われ、交換価値が生産物の社会的形態として存在し、そのかぎりにおいて貨幣が形成されるのだから、貨幣の形態を変更することによっては、商品と並ぶ貨幣の存在から生じる矛盾や混乱はなくなれないということである。ブルジョア的な商品生産が必然的に貨幣を生み出したのであって、歴史的に特殊な経済制度を前提として貨幣の廃棄を主張することはできない。

「ブルジョア的な交換制度そのものが一つの特有な交換用具を必要とするのではないか、その制度がすべての価値にたいする一つの特別の等価物を必然的につくり出すのではないか？」(Gr. D.46, M.61)。「貨幣のいろいろな文明化された形態——金属貨幣は……どのような形態も、依然として貨幣の形態であるかぎり、そして貨幣が依然として本質的な生産関係であるかぎりでは、貨幣の關係に固有の矛盾を止揚できるわけではなく、ただあれやこれやの形態で代表するにすぎない」(Gr. D.42~3, M.58)。

「問題は一般的にこう言えよう。流通用具——流通組織の変化によって、現存の生産関係とそれに照応する分配関係とを変革することができるのか」(Gr. D.42, M.57)。

交換価値が商品と並んで自立化したものが貨幣であるから、交換価値・貨幣を前提したうえで、労働時間紙券銀行や諸個人によって生産全体を規制することはできない。歴史的に特殊な生産や分配関係の基礎上で、労働生産物は商品形態をとり、交換価値が自立化⁵⁾して必然的に貨幣を形成

するからである。たとえ、貨幣の形態を金銀や銀行券から労働時間紙券にとりかえても、貨幣を必然的に形成しなければならない根本的問題は何一つ解決されていない。

ダリモンの提起した問題は、銀行券の金への兌換の停止から恐慌がおこるという問題よりもむしろ、貨幣の形成の必然性をどのように把握するか、貨幣の本質と諸形態との関係をいかに理解するか、をめぐる一般的問題であった。ダリモンの恐慌論はいかに誤りであるか、恐慌が貨幣運動を通じてあらわれるのはなぜか⁶⁾に解答を与えると同時に、ダリモンの提起した問題を精密に研究することによって、貨幣諸関係の一定の諸規定の必然性を証明し、その事実をできるだけ完全に確認しようとしているのである。

- 2) 銀行の保有している有価証券の残高は、貨幣残高を示すのではなく、帳簿のうえに存在する貨幣請求権の残高を表示するのであって、同一貨幣片は預金され、貸付けられることによって、多くの貨幣量を生み出すのではなく、ただ多くの債務請求権・貨幣請求権に転化するにすぎない。流通手段に対する需要と信用の必要とは、一致するものではないということは、流通手段として用いられる貨幣量を規定する要因と貸付資本の運動を規定する要因との相違にねざす。前者の場合には、流通手段としての貨幣の機能上の問題であって、W-G-Wという商品流通のばあいには、一個の貨幣片は二つの商品価格を、つまり商品の販売と商品の購買とにおける商品価格を実現することになる。もしかりに商品価格が10万円であるならば、販売と購買という二度の形態変換によって、20万円の商品価格が10万円の貨幣で実現されたことになる。もし、貨幣の流通速度に変化がないならば、取引商品価格の大きさによって、流通手段としての貨幣量が規定されることは明らかである。これに対して、手形割引により、または有価証券などを担保にして発行される銀行券は、満期にきた手形の支払と預金とによって銀行に還流する。中央銀行は、市中銀行を通じてBに対してA宛の手形を割引くことによって、銀行券を貸付ける、Bはこの銀行券でCに満期にきた手形を支払い、Cは市中銀行を通じて中央銀行に預金すれば、Cの預金によって銀行券は流通を終了して中央銀行に還流するが、中央銀行のBに対する貸付は手形の満期日まで残る。同じように今度は、Cは有価証券を担保にして中央銀行から貸付けられた銀行券をBに支払い、Bは支払われた銀行券で中央銀行に対して満期にきた手形の支払を行なえば、Cに貸付けられた銀行券は、Bの満期手形の支払によって、中央銀行に還流する。このばあいにも同様に、銀行券の流通量は増加しないのに、Cに対する中央銀行の貸付＝有価証券量は増える。銀行の側で信用需要を満たすことが、かならずしも銀行券の流通を増加させるとはかぎらないのである。
- 3) 中央銀行の手もとにある有価証券量と流通貨幣量とは一致しないことについては、すでにフラトーンが『通貨論』（初版1844年）の中で述べている。「……イギリス銀行の手にある有価証券の量は、その銀行券の流通高と同じ方向に動くよりも反対の方向に動くことの方が多いのであり……」（Fullarton, *On the Regulation of Currencies*, 2nd. ed., P.97, New York, 1969. 天利長三訳『通貨論』岩波文庫, 1941年, 127ページ）。「貸付資本にたいする需要と追加流通手段にたいする需要とはまったくちがうものであって、いっしょにあらわれることはめったにない」（P.82. 邦訳110ページ）。
- 4) 銀行券の流通は商品流通に起因して流通する。銀行券の運動をひきおこすのは、商品流通自体である。「現実に流通する貨幣の量は……諸商品の価格と諸取引の量とによって決定される……。同じ法則は銀行券流通においても支配する」（K. III, S.567 [538]）。したがって、中央銀行の十分な金属準備というのは、銀行券の金との同一性を確保し、金に値するものとして、銀行券を流通させる保証条件をなすにすぎないのであって、けっして銀行券を流通させる根拠とはならない。一国における貨幣の流通量と金の現実的存在量とは全くちがう概念であり、相互に異なる意義をもつ。銀行券の流通量を金属準備量＝現実的な金の存在量の増減と人為的に結びつけようとした1844年のピール銀行条例が銀行券流通の無理解から失敗に終わったことは、『資本論』第3巻第33章及び第34章において詳述されている。
- 5) 貨幣は交換の不便をなくすために人間が人為的に、または国家権力によって創造したという説があるが、そうではなく、交換の内部から、交換の発展につれ、交換を通じて形成されてきたのである。貨幣は当面する交換の困難を解明する目的のために発生したものではなく、交換行為の結果として登場するものであって、

交換行為に先立ち、潜勢的にその発生の萌芽が含まれているのであった。

「国家が協定によって発生するのではないのと同様に、貨幣も協定によって発生するのではない。貨幣は、交換から (aus dem Austausch), 交換のなかで (im Austausch), 自然発生的に発生し、交換の産物である」(Gr. D.83, M.97)。

このようにマルクスは、価値の規定から出発して、商品生産が発達し、商品交換が発展するとともに、価値の規定が自己を主張する諸関係が発展し、貨幣が形成される、と論じているのである。

- 6) 金銀の兌換の困難が恐慌の発生原因であるとするダリモンの主張に対して、マルクスは、1809年、11年恐慌は兌換停止下で発生したこと (Gr. D.45, M.61), 兌換自体は債務請求権にすぎず、貨幣の形態であって、兌換が展開されたからといって恐慌を阻止しえなかった事実をあげて反証しているし、また金流出＝「金減少」が恐慌の原因だとする論拠に対しては、「穀物不足に原因する恐慌は、地金の流出に対抗して設けられる防止手段によってかえって増強されるとはいえ、けっして〔地金〕流出から生じたのではない」(Gr. D.49, M.64)。「金流出が穀物恐慌の原因ではなくて、穀物恐慌が金の輸出の原因である」(Gr. D.50, M.65) ことを事実により論証している。それだけでなく、仮象＝非本質的なものの現象が本質であるとダリモンが把握しなければならなかったのはなぜか。この問題を、恐慌が貨幣恐慌として登場してこなければならぬ可能性の問題としてマルクスは3つの段階に区別しながら論じている。

第一に、商品が二重に存在しているという単純な事実——商品と貨幣という独立の存在形態をとることによって、恐慌の可能性が発生する。商品自体の交換可能性が貨幣の形態をとるならば、商品と貨幣とはたえず直接同一性の関係を維持できるかどうか、両者がつねに交換可能であるかどうかは、外的条件とむすびつき、外的事情にゆだねられる。そこで外的事情の内的矛盾が累積するならば、それは商品と貨幣とが交換できない条件を、貨幣が商品とならぶ外的な物として存在する。相矛盾した諸関係が発展しうる。商品と貨幣という独立した姿をとることによって、恐慌の可能性を本質的に含むこととなる (Vgl. Gr. D.65～6, M.81～2)。

第2に、さらに、交換価値が商品と貨幣とに分裂するのと同様に、交換行為も販売と購買に分かれる。この二つの行為は、空間的にも、時間的にも分離され、無関係な存在形態をとりうる (Gr. D.66, M.82)。また『資本論』第1巻第3章第2節流通手段においても、「自立して互いに相対している諸過程が一つの内的な統一をなしているということは、とりもなおさず、これらの過程の内的な統一が外的な諸対立において運動するということを意味する」(K. I, S.118 [127])。こうして外的な自立化が特定の点まで進行すると、統一が一つの恐慌を通して暴力的に自己を主張する。販売と購買という発展した運動形態は、恐慌の可能性を含むのである。

第3に、さらに生産者と商人という新しい関係が登場すると、交換のための交換が登場する。商人と生産者、商人と消費者とは、結局相互に制約しあわなければならぬとはいえ、全く異った法則と動機とによって規定されており、相互のあいだで、最大の矛盾においることがおこりうる。すでにこの分離のうちに商業恐慌の可能性がある (Gr. D.67, M.83)。「販売と購買との分離は、商品生産者と商品消費者とのあいだの最終的交換が行われるまえに、本来の商業とともに多くの空取引が行われることを可能にする。……ブルジョアの労働の諸矛盾の発展の可能性が与えられていることを意味する」(Zur Kritik. Bd.13, S.79)。「…商品の本性から生じるW-GとG-Wとの分離は別にしても仮空な需要が創造される」(K. III, S.395 [316])、「近代的信用制度のもとでは、商人資本は、社会の総貨幣資本の大部分を自由にしており、したがって、すでに買ったものを決定的に売るまえに、自己の購入を反復することができる」(K. III, S.335 [316])。

なお生産者と消費者とのあいだの交換の分離が商業恐慌の可能性を含むという指摘については、『剰余価値学説史』(Mw. II, SS.496～7, S.514)および『経済学批判要綱』(Gr. D.112, M.127)等において何度も論述されている。このように、商品と貨幣との関係を通じて、またこの二つの関係の中で恐慌が発生するというところを、ダリモンは商品と貨幣との関係から恐慌が発生すると解したのである。恐慌の発生過程を恐慌の基本的な根拠と見誤ったダリモンの位置をマルクスは明確した。さらにいっそう根本的に重要なことは、この批判を通じて、第一の視角においては貨幣の基本的な性格を、第2のそれにおいては流通手段の、第3においては支払手段の根本的な把握の論理を明らかにしたということである。ダリモンの提起した恐慌の発生原因を批判しつつ、実はマルクスは貨幣の本質と諸形態の概念的把握の糸口としたのである。

II 貨幣形成の基本視角

『経済学批判要綱』のなかでマルクスが力説した貨幣形成の基本視角は、「生産物の交換価値が生産物とならぶ貨幣を生みだす」(Gr. D.83, M.98)ということであった。商品の交換価値——貨幣という視角が貨幣把握の基本であり、鍵であった。「交換価値が貨幣を生みだす」ということが貨幣認識の要石であることは次の章句によく示されている。

「生産物の交換価値のかたちでの規定は、交換価値が生産物からきりはなされ、解放された一つの存在を受けとることを必然的にもなってくる。諸商品それ自体から解放され、みずから——商品として諸商品とならんで存在する交換価値は——貨幣である。交換価値としての商品すべての諸性質は商品とは異なった一つの対象として、商品の必然的な存在形態から解放された一つの社会的な存在形態として、貨幣において現われる……生産物の交換価値は、生産物と並んで貨幣を生みだす」(Gr. D.63~4, M.78~80)。

「生産物は商品になる。商品は交換価値になる。商品の交換価値は、商品とならぶ特殊な存在を受けとる……そういう形態にある商品が貨幣としての商品である」(Gr. D.82, M.97)。

「商品が一般的な交換価値になるということから、交換価値が一つの特殊な商品になるということがおこってくる。……商品の貨幣性質に対して一つの特殊の商品が貨幣主体としてあらわれるということは——交換価値それ自体の本質から出てくることである」(Gr. D.84, M.98)。

交換価値から貨幣の形成をとくということとは、次のような方法が前提されることとなった。(1)商品の生産のみが前提され、商品交換という外的諸条件が捨象されたこと、(2)貨幣のさまざまな諸形態が捨象され、貨幣一般として論じられたこと、(3)等価物となる貨幣材料の自然的性質も二次的なものとしてとりあつかわれたこと、である。

貨幣の諸形態や外皮を捨象し、その形態の基礎にある内容をつかみ出し、その内容を表現する特殊な形態を一般化する方法⁷⁾がとられた。つまり、商品が、その交換価値を社会的に妥当な形態として、その自然形態とは別の生産物において表現しなければならない。商品の交換価値から貨幣形成をとくということとは、商品から独立した関係、たとえば、当面する交換の困難といった外的事情からではなく、商品自体の内的性質の外化からとくことになる。したがって、当面する交換の困難、国家政策、銀行の介入という事情は、貨幣形成の理論の中では捨象されたのである。

つぎに、貨幣にはさまざまな形態がある。貴金属貨幣、紙幣、信用貨幣、労働貨幣等々は、生産力の発展、商取引の事情によって規定されている。同じ人々の間で、くりかえし取引が行われるならば、手形という信用貨幣が流通することになる。貨幣というのは、現実には、いずれかの形態をとっているが、このような具体的な諸形態も捨象された。

さらにまた、貨幣それ自体の素材も捨象された。商品流通の一定の発展段階に照応して一定の地域内では、さまざまな種類、種々の形態の貨幣が一般的等価の役割を演じてきた。商品交換の低い段階では、他の諸商品と交換で引きわたす場合に、よるこんで交換で受けとられるであろう商品、例えば、塩、毛皮、家畜、奴隷など最も重要な富の構成要素をなす商品——一般的使用価値をもつ商品——が貨幣として用いられた。商品交換の範囲が拡大し、商品取引量が増加し、取引される商

品種類が多様化すると、それにつれ、貨幣商品も変化し、発展してきた。商品流通のより高い段階では商品価値の一般的等価に立つ商品は貴金属のうえに移っていった。それは、商品流通の性格——媒介的、瞬過的な性格によるものであった。

そこで一般的使用価値をもつ商品も、貴金属それ自体も素材的な意義を捨象し、貨幣を一般的社会的形態として把握するという方法をマルクスはとったのである。したがって、いかなる商品種類が貨幣の地位を占めたかという目録を読みあげる方法を俗流的方法としてしりぞけている（K. I, S.63〔72〕）。商品流通の一定の発展段階において、商品流通の地域的制約のもとで、一定の慣習と結びつきながら種々の商品が商品貨幣としての地位を占めてきたが、それがいかなる商品種類であろうとも、これらの商品貨幣の素材形態がまず捨象され、貨幣こそは一般的な等価物にほかならないことをマルクスは看取したのである。この商品貨幣の素材を捨象することによってはじめて、貨幣は商品の交換価値の一般的な形態であることが純粋理論的に把握される。マルクスは『資本論』第一巻第一章第三節「価値形態または交換価値」の結びの部分で次のようにのべている。

「貨幣形態の概念的把握における困難は、ただ一般的等価形態を、つまり一般的価値形態一般を、形態Ⅲを把握することだけである」（K. I, S.76〔85〕）。また『資本論』初版の付録も同じように、「貨幣形態の概念的把握における困難は……一般的価値形態一般……を把握することだけである」（SS. 783～4）という章句で閉じている。

さまざまな貨幣形態から一般的価値形態を分離し、抽象するということは、マルクス貨幣論の大きな特色⁸⁾の一つであり、またマルクスが複雑で具体的な問題を分析する場合の一般的な方法であるが、『経済学批判要綱』においては、貨幣を交換という事情、具体的な諸形態や素材からではなく、商品の交換価値の外化から展開しようとしたことは注目されるべきである。

7) 貨幣の諸形態についてマルクスは次のように述べている。

「貨幣、すなわちすべての商品が交換価値として転化していく共通の形態、つまり一般的な商品は、それ自体他の諸商品とならぶ一つの特異な商品として存在しなければならない。それは、すべての商品がただ頭の中だけで貨幣を尺度として測られるばかりでなく、現実の交換で貨幣と交換され、それと引き換えられねばならないからである。……貨幣として役立つであろう商品は……第一に富を代表し、もっとも一般的な需要と供給との対象であり、特殊な使用価値をもっている、そういった商品である。塩、毛皮、家畜、奴隷がそれであった。〔第二に〕発展がすすむにつれて、ちょうどこの反対のことが起ってくるであろう。すなわち消費の直接対象とか、または生産の用具とかであることの最も少ない商品が、まさしく、交換そのものの必要に役立つという側面をもっともよく代表するようになるであろう。第一の場合には、商品はその特殊な使用価値のゆえに貨幣になる、第二の場合には、商品は、それは貨幣とし役立つということから、その特殊な使用価値を受けとる」（Gr, D.82～83, M.97～8）。

8) われわれは商品価格の表章をもっており、人々の交換意志は、それによって規制されるが、この貨幣によって表現される商品価格をその一般的基体に分離した。この貨幣形態こそ一般的価値形態にほかならず、人々を幻惑させる貨幣こそ一般的社会的な等価形態にほかならないことをみ出し、一般的価値形態の成立の論証によって、貨幣形態の本質を解明するという方法がとられた。

このような方法は『資本論』の中でしばしば用いられているものである。たとえば利潤、利子、地代という具体的な形態をはぎとって、一般的基体として剰余価値概念を抽象し、またさまざまな部門における相違なる具体的な利潤諸形態を捨象し、平均利潤、利潤一般という概念を抽象するのと同じである。『経済学批判要綱』においては、貨幣という物象から交換価値一般が抽象されている。「貨幣の一つの形態——貨幣が交換手段であるかぎり——では、貨幣の存在が社会的連関の物象化を前提としていることは、経済学者たちに

は明らかである。……人々が信頼を寄せている物象とは、明らかに、諸人格相互のあいだの関係が物象化されたものとしての物象、つまり物象化された交換価値としての物象であるにすぎず、そして交換価値とは、諸人格相互間の生産的活動の一つの関連にすぎない」(Gr. D.78, M.93)。

人々が日常的に経験する諸商品の交換価値という商品価値を出発点としなければならない理由は何か、貨幣という独自の形態が成立すると、その貨幣だけで自立化し、生みの親である商品の交換価値との関係はいんべいされる。貨幣は商品の交換価値の転化したものであるのに、貨幣の存在によって商品の社会性が付与されるようにみえ、商品流通の結果として貨幣が流通するのに貨幣が原因で商品が流通するかのようにみえる。商品の交換価値から貨幣が形成されることの論証のためには、物象的な性格はまず捨象されることとなった。

Ⅲ 貨幣の本質＝価値形態

商品の交換価値から貨幣をとくうえで重要なことは、交換価値の実体は何かという分析を行うことだけでなく、もっと根本的には、その実体を前提して、交換価値＝対象化された労働時間が一般的・社会的に妥当な交換可能な形態をいかにとるかということである。『経済学批判要綱』においては、交換価値の実体は労働時間であることはすでに前提されている。「貨幣の分量は、商品に対象化された労働時間によって規定されている。ある定まった労働時間の現実化として商品は交換価値である。」(Gr. D.84, M.99)。「貨幣は一般的対象物としての労働時間であり、または、一般的な労働時間の対象化、一般の商品としての労働時間である。だから、労働時間は交換価値を規制するものであるから、事実上その内在的な尺度であるだけでなく、その実体そのものであり、…」(Gr. D.85～6, M.100)。

マルクスにとって重要なことは、労働時間としては相互に同等で、等置可能であるにもかかわらず、対象化された交換価値としての関係⁹⁾においては、労働時間とは異なった貨幣という物象的表現をとらねばならないということであった。マルクスはアダム・スミスを批判して、商品を生産する労働時間と貨幣として意義をもつ対象化された労働時間との関係が正しく理解されていないという。

「アダム・スミスは述べている。労働(労働時間)はすべて商品が購買される本源的な貨幣である、と。生産行為を考察すれば、このことは依然として正しい(相対的価値の規定にかんしても同様である)。どの商品も、生産においてはつねに労働時間と交換されている。労働時間から区別された貨幣の必然性は、一定量の労働時間が、その特殊な生産物で表現されるべきでなくて、媒介された一般的生産物で同一労働時間の……他のすべての生産物にたいしてひとしく かつ引換えのできるものとしての特殊な生産物で表現されるべきだということから生じる」(Gr. D.84～5, M.99)。

「アダム・スミスのばあいには、……特殊な労働生産物(特殊な対象としての労働時間)とならんで、労働者はなお一般的な商品のある分量(一般的な対象としての労働時間)をつくらねばならない。交換価値の規定が彼にとって外的にたがいにならんであらわれている。」(Gr. D.86, M.100)。

スミスの貨幣把握の不十分さは、労働者や農民が彼の生計の一部を直接に彼の生産物で支えており、労働時間がまだ十分に分化していないという、生産のより低い段階に照応しているだけでなく、

なにゆえに対象化された労働時間が貨幣において現われるかという価値の形態の把握を欠いていたからである。「古典派経済学の根本的欠陥の一つは、それが商品の、および殊に商品価値の、分析からして、価値をまさに交換価値となすところの価値の形態を見つけ出すことに成功しなかったということである」(K. I, S.86. [95])。

『経済学批判要綱』において、マルクスは価値形態をどのように扱っているのであろうか。

「価値としては、商品は等価物である。等価物としては、商品のすべての自然的性質は商品において消失している。商品や他の商品にたいして、もはや質的に特殊な関係にあるのではなく、他のすべての商品の一般的尺度であり、……一般的交換手段でもある。価値としては、商品は貨幣である。しかし商品が……価値として自己から区別されているがゆえに、それは価値としては生産物としての自己から区別されている。価値としての商品の属性は、商品の自然的存在とはちがった存在をとることができるし、またとらねばならない。……商品の価値はまた、商品と質的に区別されうる存在をもたなければならない。しかも現実の交換では、こうした可分離性が現実の分離にならなければならない。なぜならば、諸商品の自然的な相違性が、それらの経済的な等価性と矛盾せざるをえないからであり、両者は二重の存在を獲得し、自然的な存在とならんで純粹に経済的な存在を獲得することによってだけ、相並んで存在できるからである」(Gr. D.60, M.76)。

「したがって過程は簡単に次の通りである。……商品を自己自身に交換価値として等置するためには、商品は、交換価値そのものとしての商品我代表している章標ととりかえられる。ついでこのように象徴化された交換価値として商品は、ふたたび、一定の割合で他のいずれの商品とでも交換されうる。生産物が商品となり、商品が交換価値となることによって、生産物はまず頭の中で二重の存在を受けとる。こうした観念上の二重化は、商品が現実の交換で二重にあらわれる。つまり一方では自然的な生産物として、他方では交換価値として現われる。商品の交換価値は、物質的に商品から切りはなされた一つの存在を受けとる……諸商品それ自体から解放され、みずから一商品として諸商品とならんで存在する交換価値は——貨幣である。交換価値としての商品のすべての性質は、商品とは異った一つの対象として、商品の自然的な形態から解放された一つの社会的な存在形態として、貨幣において現われる」(Gr. D.63, M.79)。

人々は、商品そのものに客観的に存在している商品価値という性質を質的に同一で、分量的に異なるものとして計算し、記帳する。商品価値の見積はある程度の習慣的固定性と客観的に妥当なもの、「値するもの」として他の商品との関係においてあらわれてくる。たとえば二つの商品の関係においては、一つの商品が他方の商品に対して「値するもの」、「価値性格の担い手」として自分を顕にする。関係の中で感性的に多様な諸商品とは別の第三者が登場する。相異なる諸労働生産物が相互に価値として相等しいという関係を明示するならば、関係する自然形態とは区別された価値関係が、第三者、「値するもの」としてあらわれてくるのである。商品自体の客観的な属性としての価値を抽象によって相互に比較するためには、同じ呼称におきかえねばならない。この呼称が抽象的な第三者であるが、この第三者は、「値するもの」、「交換における社会的な妥当力」、「価値あるもの」にほかならず、現実的な姿において感性的となる。X商品A量がY商品B量に値する

ということによって、Y商品B量はX商品A量の「価値存在」の具体化、その価値の現象形態となる。

諸商品はその感性的なる多様性をもつにもかかわらず、品質的に同一な、分量的に異なる交換価値を他商品で見積るならば、その他商品は交換価値としてのみ意義をもつこととなる。このような見積り・計算ができることによって商品は他商品といつでも交換可能な形態を受けることとなる。価値としての見積り・計算がなければ、生産物は特殊な使用価値をもつ一形態、自然形態のまま存在しているのであって、社会的な形態をとることはできない。商品価値の見積りという象徴された観念的な姿をとることにより、自然的形態とは異なった社会的形態を、価値として交換可能な形態を受けとるのである。

商品価値から貨幣を展開するマルクス貨幣論における最大の特徴は、関係として把握していることである。「商品は、他の一つの商品で表現され、したがって関係として表現される限りでのみ、交換価値である」、「交換価値として指定された生産物は、本質的にはもはや単純な生産物としては指定されていない。……関係として指定されている。しかもこの関係は一般的であり、一商品に対するものではなく、あらゆる商品、ありとあらゆる生産物とのそれである。したがって生産物は一般的な関係をあらわしている。「一つのものとの関係することなしには、なにももの一つとの関係を表現できず、一般的なものと関係することなしには、一般的関係を表現できない」(Gr. G.119, M.133~134)。

生産物は、一般的労働、社会的労働時間の一定分量の実現という関係においては、すべての生産物に対する等価物である。生産物は一般的関係を表現している。商品は交換に先立って、この関係を見積りや評価という観念的な姿において表現することができる。このことは現実の交換によって、商品の価格が付与されないということを証明する。商品は価格の姿において、自然的な姿と社会的な姿とに二重化し、社会的な姿においていかなる商品とも交換可能であることを示す。このような見積り、評価により観念的な姿、一つの社会的な関係を表現しているからこそ、現実の交換において、商品と貨幣というように現実的な姿をとることとなる。したがって、交換において貨幣が規定されるのではなく、商品の客観的な価値性格が交換の中で顕になるのである。

それだけでなく、交換の中で商品と貨幣とに二重化する。商品生産においてすでに含まれている社会関係は交換が十分な拡がりと重要さを獲得したときに、交換価値は貨幣という姿をとって登場する。商品交換は、商品のうちにやどっている商品の価値性格を顕にする外的強制法則なのであって、「社会的行為のみが、ある一定の商品を一般的な等価たらしめる」(K. I. S.92 [101])。現実の人々の商品交換の中では、「貨幣、すなわちいっさいの商品が交換価値としてそれに転化する共通の形態、一般的な商品は、それ自身他の商品と並んで一つの特殊な商品として存在しなければならない。というのは、この商品はただ頭の中で貨幣で測られるばかりでなく、現実の交換で貨幣と交換され、それと引き換えられねばならないからである」(Gr. D.82, M.97)。「商品が一般的な交換価値になることから、交換価値が一つの特殊な商品となるということが生じる。こうなるのは、ただ特殊な商品が他のすべての商品にたいして、それらの交換価値を表わし、すなわち貨幣になるという特権を受けとるからである。」(Gr. D.84, M.95)。

商品所有者は「彼らの商品を一般的等価物としての何らかの他の商品に対立的に連関させてのみ、

価値として相互に関連させる」(K. I, S.92 [101]) のであるが、一般的等価物は彼らの社会的行為=交換過程の中でのみ成立し、現象してくるのであるが、社会的行為=交換過程が生み出すのではない。交換過程は潜勢的にあるものを顕勢的にするのにすぎない。「一般的等価形態は、商品交換の発展につれて、もっぱら、特殊の商品種類にこびりつく」(K. I. S.94 [103])。このように商品の交換価値の本性と交換の性格とをマルクスは明解に区別したうえで、両者の関係を論じたのである。この考え方は、『経済学批判要綱』においても『経済学批判』や資本論においても変わらないのである。

9) 価値形態は一つの反省規定だとマルクスは述べている。たとえば、『資本論』初版においては、「上衣の等価としての存在は、いわばリンネルの一つの反省規定 Reflexionsbestimmung にほかならない」(K. 1st. Aufl. S.22.) 「貨幣形態は、すべての商品の関係が一商品に反省 Reflex して固定したものにすぎない」S.54, 「価格は商品の直接的な規定性ではなく、反省された規定性 reflectirte Bestimmtheit である」(Gr. D.105, M.120~1)。ヘーゲルは『論理学』における本質論の反省規定について、固有の他者について述べている。「対立関係のうちでは、区別されたものは、自己に対してたんにある他者をもつのではなく、自己に固有の他者をもっている。……両者は相互に本質的な関係のうちであり、両者のうちの一方は、それが他者を自己から排除し、そしてまさにそのことによって他方に関係するかぎりにおいてのみ存在する」(Hegel, Samtliche Werke, von Grockner, 1964, Bd. 8, S.279)。

IV 貨幣の形態と貴金属

商品の交換価値が外在し、一つの特殊な商品に貨幣という規定を与えるということをマルクスは明らかにしたうえで、これまで捨象されてきた貨幣の地位¹⁰⁾に立つ商品について検討している。すなわち貴金属が貨幣の地位に立つのはなぜかを問題にしている。貨幣は申しあわせや人々の利便のための発明ではなく、交換過程における商品本性により形成されたものであるから、交換の範囲と取引の拡大につれ、あるいは取引される商品種類の増加により、きわめて多様な、ときには多かれ少なかれ不適當な商品が、かわるがわる貨幣商品としての地位を占めてきた。商品流通の低い段階においては、最も一般的な使用価値をもつ商品——穀物、毛皮、家畜、干魚等が貨幣商品となり、商品流通の発展につれ、使用価値として用いられることの少ない貴金属が一般的等価の地位を占めた。マルクスは、このような等価形態における特殊な貨幣商品の素材的形態を捨象し、交換価値の一般的形態が貨幣にはかならないことを看取した。商品流通の中で、次々と発生する貨幣商品の特殊形態をはぎとり、一般的な交換価値の形態として貨幣をとりあげ、分析してきた。

「経済学者は、金銀を、あまり光のはえない諸商品とすりかえ、かつては商品等価の役割を演じたことのある一切の通俗商品の目録をつねに新たな満足をもってのろろと読みあげることによって、金銀の神秘的を説明しきろうとする」(K. I, S63 [73])。生産関係の連関によってではなく、金銀の特殊な素材的属性によって、貨幣の本質規定を与える考え方を退けてきたが、貨幣の基本的な規定が明らかになってはじめて、この第二義的な問題について述べている。貨幣の地位に貴金属が立つのはなぜかを論じている。貨幣商品となる特殊な使用価値(素材的性質)——永続性、不変性、不可分離性、可分離性、再合成の可能性、わずかの価

値のうちに多くの価値を含んでいること、容易な運搬の可能性、歴史的に早くから知られた金属、稀少性、はっきりと見分けのつく金属、——のゆえに貴金属が貨幣商品に妥当なものとして登場する¹¹⁾ (Vgl., Gr. D.91~101, M.106~117)。

「〈金銀は生まれながらに貨幣ではないが、貨幣は生まれながらに金銀である〉ということは、金銀の自然的属性が貨幣の諸機能と適合していることを示す。……金見本が同じ均質な物質……価値の大きさの区別は純粹に量的なものであるから、貨幣商品は純粹に量的な区別のできるもの、つまり任意に分割できてその諸部分がふたたび合成できるものでなければならない。ところが、金銀は、生まれながらにこうした諸属性を具えている。」(K. I, S.95 [104])。

金銀以外の他の貴金属については、「(1)白金は色がなく、稀少すぎる。(2)水銀は液状を呈し、蒸発しやすく、蒸気は有毒である」(Gr. D.92, M.108~9)。

マルクスは、商品の交換価値から貨幣がいかにか形成されるかという問題と、貴金属が貨幣の地位を占めるのはなぜかという問題とをげんみつに区別した。前者は貨幣の本質は何かにかかわる問題であり、後者は貨幣の形態にかんする問題だからである。この両者を区別したうえで、貨幣の本質から貨幣の一般的形態を、形態のうち等価物としての貴金属の地位をとりあげている。私的所有と社会的分業という生産関係をそのままにして、貨幣の廃止や貨幣形態の変更(金、銀、銀行券→労働貨幣)を主張する論者に対する反駁の必要から生じた研究が、結果として貨幣理論を精緻にしたのである。

10) 種々の貨幣商品から一般的等価物という類概念を抽象するという方法は、『哲学の貧困』の中にすでに確立されている「ひとたび、貨幣の必然性を認めてしまえば、問題としてあとに残るのはただ、なぜこの特殊な機能が他のすべての商品に帰属されないで、金と銀とに帰属されるのか、その理由を説明することだけである。それはもはや、生産関係の連関によっては説明されず、金銀の特殊な素材の諸属性によって説明される第二義的な問題である」(Werke, Bd. 4, S.107)。

11) 「商品交換がそのまま地方的な限界を打破り……拡がってゆくにつれて、貨幣形態は、生まれながらに一般的等価という社会的機能に適する商品のうえに、貴金属のうえに、移ってゆく」(K. Bd. 1, S.95 [104]. Vgl. Kr. Werke, Bd.13, SS.35~6, K. 1st Aufl.783)。

V 貨幣の諸形態規定

商品の交換価値から貨幣がいかにか形成されてくるかが論じられた¹²⁾後、『経済学批判要綱』「貨幣の章」後半部分において、商品流通と貨幣流通との関係がとりあげられ、商品流通の発展にともなう貨幣の諸形態規定が解明される。『経済学批判』や『資本論』では「貨幣または単純流通」、
「貨幣または商品流通」にあたるところの、いわゆる「貨幣の諸機能」に該当する内容が論述される。商品流通の中で受けとる貨幣の規定として、(a)価値尺度、(b)流通手段、(c)貨幣蓄蔵、(d)支払手段、(e)世界鑄貨・世界貨幣がとりあげられており、『経済学批判』や『資本論』において、いっそう精緻に仕上げられてゆく考え方の基本的なものがちりばめられている。もちろん、文章のパラグラフからパラグラフへの論理的、歴史的な連関や脈絡は綿密にはえがかれていない。貨幣の形態規定の論述の中にその本質規定が含まれ、引用文が入りこんでいる。叙述は段片的であり、暗示的・

記録的である。多くの著述や資料からの引用文があり、長い論述があるかと思えば簡単な記述があり、前後関係も統一されていない。しかし、価値尺度と流通手段との関係、流通の中断、否定としての蓄蔵貨幣、商品流通の特殊形態としての支払手段の規定等『経済学批判』や『資本論』でみられる基本的な規定は『経済学批判要綱』貨幣の章のこの後半部分に包含されていることは注目に値するといつてよい。

1 価値尺度としての貨幣

価値尺度、流通手段、蓄蔵貨幣を論じるにあたっては、商品流通が広がり、流動的であり、それが社会の全表面に及んでおり、一つの総体を形成しているということが前提である。かんたんにいえば、商品交換がくりかえし行われ、広範囲に及んでいることである。「流通の本質的な規定は、それが諸交換価値を、しかも諸価格として規定された諸交換価値を流通させることである。」(Gr. D.105, M.118)。

商品の流通においては、商品は価格をもって登場する。つまりA商品の価値を他のB商品の一定量で表現することに、そのA商品の自然的な形態とは異った価格性格をB商品において表現すること、このことによりBはA商品の価値の尺度となる。「商品を交換価値として措定するためには、一つの媒介が必要である。それゆえ貨幣において、交換価値は別のあるものとして商品に対立している。貨幣として措定された商品であつてこそ、はじめて純粹な交換価値としての商品である」(Gr. D.103, M.119)。「価格においては、一定分量の貨幣として表わされている。価格においては、第一に、あらゆる交換価値の統一性としてあらわれ、第二に、単位としてあらわれる。……あらゆる交換価値の量的規定性は……貨幣との比較を通じて表現されることになる。したがつてこのばあい、貨幣は諸交換価値の尺度として、そして諸価格は貨幣を尺度として測られた諸交換価値として、措定されている。貨幣が諸価格の尺度である」(Gr. D.104, M.120)。

価値尺度としての貨幣は「商品が貨幣として表象 *vorgestellt* される一規定」(ibid)、「価格において観念的 *ideell* に措定されている」(ibid)のものであり、計算されるもの(値ぶみ、付け値、賃料、債務や在庫品の見積り、支払勘定、簿記、予算等)である。「尺度としては貨幣はつねに計算貨幣として役立つ」(Gr. D.105, M.121)。価値尺度としての貨幣は商品の価値をその価格形態に転化させるにさいしての、金の媒介的機能であるが、その機能は観念的なものであつて、計算貨幣である。その場合には一つの基準=度量標準を定めなければ、比較するための同一単位をもちえないであろう。「貨幣による計算の操作は、物質的な諸量の比較のばあいに、重量が使用されるのと似ている。……重量尺度と価値尺度とは同じ名称である」(Gr. D.107, M.122)というシモンディからの引用文において度量単位の指摘はみられるが、『資本論』にみられるような価格の度量基準にかんする明確な規定は『経済学批判要綱』では、断片的(Gr. D.680, 685~6)にみられるにすぎない。

2 流 通 手 段

『経済学批判』や『資本論』における流通手段は、(一)商品の変態、(二)貨幣の流通、(三)鑄貨・価値章標の三つの項目からなりたっており、その中でも「商品の変態」に力がそそがれている。流通手段の分析を商品の形態変換または変態の側面から把握しようとしたからである。「われわれは、全過程を形態の側面から、すなわち、社会的な質料変換を媒介する諸商品の形態変換または変態のみを、考察しなければならない」(K. I, S.109 [119])。

『経済学批判要綱』における流通手段の規定は諸商品価格を実現することによってえられる規定としてとらえられており、貨幣の流通については、流通に必要な貨量の規定があたえられている程度であり、流通手段としての貨幣の瞬過性に基礎をもつ価値章標についても、断片的にふれられているにすぎない¹³⁾。

「流通では貨幣はただ諸価格を実現することにすぎない……。価格はまずなによりも観念的规定として現れるが、しかし商品と交換された貨幣は、商品の実現された価格、その現実的価格である」(Gr. D.113, M.128)。

「交換価値が、価格の形で観念的に貨幣に転化されるならば、それは交換においては、購買と販売においては、現実に貨幣に転化され、貨幣と交換されて、貨幣として次いでふたたび商品ととりかえられる。……商品はあらかじめ観念的に貨幣に転化されたのちに、……はじめて貨幣と現実に交換され、現実の貨幣に転化される。したがって価格は、その実現がどれほど貨幣流通の結果としてあらわれても、貨幣流通の前提なのである」(Gr. D.108, M.123)。

価値尺度と流通手段としての貨幣との区別を明白にしたうえで、価格＝観念的な貨幣量を実現するものという両者の関係をはっきりさせ、流通手段としての貨幣は商品価格を実現することによって与えられ、それが商品価格を規定するのではないことを示したのである。『経済学批判要綱』においては、ヒュームやリカードの貨幣数量説批判が強く意識されており、価値章標に関する規定は『経済学批判』の執筆中に完成されてきたと考えられるのである。

3 貨 幣 — 蓄蔵貨幣 —

商品の形態変換が中断され、販売がそれにつづく購買によって補足されなくなることによって、貨幣が不動化される。このような貨幣を蓄蔵貨幣とよばれている。流通手段の場合には、 $W-G$ のあとに $G-W$ がつづき、貨幣は過程を媒介する瞬過的な存在にすぎないが、蓄蔵貨幣の場合には、 $W-G$ は $G-W$ によって補足されず、商品価格を実現した貨幣は商品の購買にむかわないで流通から脱落する。貨幣は商品流通の媒介的、流動的、瞬過的な契機においてではなく、流通の結晶的産物として、流通の流れの中断、固定的な契機において存在する。それは運動においてではなく静止において、並列的、継起的な流れにおいてではなく、「富の社会的性格の自立化した化身」＝「富の絶対的な存在」として把握される。商品価格を実現した貨幣が流通するか、あるいは流通を中断させ、そこから脱落するか、という意味では、流通手段と蓄蔵貨幣は対立するのである。さらに持手からどんどん遠ざかっていくという意味では、流通手段としての貨幣は、瞬過的、象徴的である

が、「一般的富」＝「富の絶対的な性格」として致富の対象、致富欲の原因なすという意味では、蓄蔵貨幣は固定的、現物的である。

「貨幣はくすべてのものの概括」であり、そこでは商品のもつ特殊的性格は消えうせている。つまり、貨幣とは、商品世界において富が拡散し、分散していることとは、対照的な、簡潔な要約としての一般的な富である。商品が富の特殊的な一契機として現われるが、これに対して、金と銀においては、一般的な富それ自体が特殊的物質に集約されたものとしてあらわれる」(Gr. D.131～2, M.145)。

貨幣は商品の価格を実現することによって一般的等価物＝価値一般＝直接交換可能性の形態を受けとるから、蓄蔵貨幣は「富の一般的形態」「一般的物質的代表物」という地位を占める。「貨幣は、(一)実現された価格であり、どんな特殊性に対してもまったく無関心に、どんな欲望の対象とでも交換されるかぎりでは、どんな欲望をも満たすのである」(Gr. D.132, M.145)。

貨幣が交換価値の自立した絶対的形態＝「富の一般的形態」＝「富の総体性」として登場するにつれ、諸商品の支配者となる。「貨幣は諸商品の天国的存在をあらわしており、諸商品は貨幣の現世的存在をあらわしている」(Gr. D.133, M.146)。金銀が自然発生的に抽象的社会的富として登場してくれば、それは致富欲の推進的動機を形成する。富の絶対的形態としての金銀は、その美的性質を利用して、富の誇示手段となる。社会の発展の低い段階では、量的な制限性と質的な無限性により、致富欲の対象であるばかりでなく、さらに致富欲の源泉となり、人々をシジフォスの労働にかりたて、禁欲、節約、吝嗇においやるのである。「貨幣は致富欲の一つの対象であるばかりではなく、致富欲のほかならぬ対象なのである。……貨幣は致富欲の対象であるばかりでなく、同時に致富欲の源泉でもある」(Gr. D.133, M.146～7)。

蓄蔵貨幣は致富欲の対象であると同時に致富欲の源泉となることによって、自己目的となり、それ自体で自立化するのである。

12) 価値尺度、流通手段、蓄蔵貨幣等の諸規定を、マルクスは、貨幣の機能それ自体に含まれている内的矛盾の展開として論じたのではなかった。商品流通の発展の中で受けとる形態の規定として把握した、『経済学批判』第二章「貨幣または単純流通」のまえがきにあたるところで、貨幣が商品そのものから発生するという理解のもとで、「なお問題となるのは、貨幣の固有の形態規定性を純粋に把握することだけだ」(Werke, Bd,13 S.49)とマルクスはのべているが、貨幣の発生の必然性を商品から——商品の交換価値の展開から——説いた後に、商品流通から貨幣の種々の形態規定性を与えようとした。このいみでは『経済学批判要綱』も同じ立場に立っていた。

「貨幣の流通 Circulation 又は通流 Umlauf は商品の反対方向の流通または、通流に対応している」(Gr. D.101, M.117)。「貨幣が商品のための流通の車輪であるなら、商品は同じく貨幣のための流通の車輪であることだけは、最初から明らかである。貨幣が商品を流通させるとき、商品は貨幣を流通させる。だから商品の流通と貨幣の流通とは相互に制約しあっている」(Gr. D.102, M.117)。

「貨幣の諸性質、(1)商品交換の尺度としての、(2)交換手段としての、(3)商品の代表物としての(したがって契約の対象としての)、(4)特殊な商品とならぶ一般的な商品としての、これらはすべて、商品自身からきりはなされた対象化された交換価値という貨幣の規定から単純に出てくる」(Gr. D.64, M.80)。このように、商品と貨幣とを関係させながら、商品流通の中における貨幣の形態規定を与えることは、マルクス貨幣論の独自の方法であると思われる。

13) 価値章標に関して、『経済学批判要綱』の中で全くふれていないのではない。「流通手段の形態において指定された貨幣は、铸貨である。铸貨としては、貨幣はその使用価値それ自体をすでに失っている。……貨

幣は鑄貨においてはやはり、ただの章標 Zeichen であるにすぎないのであって、その材料に対しては無関心である」(Gr. D.137, M.150) vgl. D.695~6. D.698~9.

VI む す び

以上みてきたように、マルクス貨幣論の大きな特徴は、商品生産者たちの行動とそれにもとづいて生じる貨幣現象を研究して、その本質を究明することであり、さらにそれに完成形態を与えることであった。無から有をつくりだすのではない。複雑多様に存在し、たえず変化する貨幣運動の過程を研究し、その諸現象を支配する法則を発見するとともに、系統的、全面的に分析し、総合し、そこからある主要な因果関係、相互作用、決定的なものを把握すること、そして一つの形態から他の形態への、一つの秩序から他の秩序への関連を、価値関係の展開の必然性でもって証明し、ばらばらに見える諸現象を再構成して完全な姿において叙述することである。こうして貨幣の本質、貨幣の形態および貨幣の運動=諸機能のあいだの内的必然的な関係を発見することであった。

『経済学批判要綱』の貨幣の章は、論理的に体系化されて叙述されておらず、断片的、記録的(メモ的)であり、くりかえしが多く、センテンスからセンテンスへの関連も整理されていない。しかし全体的にみれば、上述のマルクス貨幣論の特徴が力強く形成されつつあることがわかるのである。